

エンカウンター (ENCOUNTER)

第 179号

平成29年3月20日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 080-1232-0905

<http://encounter.agape.gr.jp/>

内村鑑三「統一日一生」より (11)

11月1日

主のおきては完全であって、魂を生きかえらせ、主のあかしは確かであって、無学なものを賢くする。主のさとしは正しくて、心を喜ばせ、主の戒めはまじりなくて、眼を明らかにする。主を恐れる者は清らかで、とこしえに絶えることがなく、主のさばきは真実であって、ことごとく正しい。これらは金よりも、多くの純金よりも慕わしく、また蜜よりも蜂の巣のしたたりよりも甘い。
(詩篇 19・7-10)

聖書の研究なり。その批評的研究にあらず。また感情的研究にあらず。聖霊により、常識をもってする、深き静かなる研究なり。あらゆる思想に訴え、あらゆる事実に鑑(かんが)み、宇宙と人生とを支配する神の聖意の探求なり。聖書の研究はすべての研究の中に最も広くして最も深き研究なり。実在の中心に達せんとすることなり。愛をもって万有を解せんとすることなり。

11月7日

主よ、あなたは世々われらのすみかでいさせられる。山がまだ生まれず、あなたがまだ地と世界とを造られなかったとき、とこしえからとこしえまで、あなたは神でいさせられる。(詩篇 90・1-2)

信者はおのれに神の恵みを十分に実験し、喜びと感謝にあふれて世をしてこれに感染せしむべきである。この世に満ちあふるるものは不平の声である。失望のうめきである。これを打ち消すに、神の民の讚美の声をもってせざるべからず。われらにして喜ばざらんか、たれか喜ばん。「賛美は直きものにふさわしきなり」とあるがごとし(詩篇 33・1)。われらはわが国と全世界とを賛美化するの責任をになうものである。

喜びと感謝はキリスト教の基調(キーノート)である。信者の生涯を通して一貫するものは感謝である。善きことも悪しきことも感謝の種である。人生最大の感謝は、神われとともにいましたもうことである。「なんじ神を有す。また何をか要せん」とあるがごとし。

11月8日

主はおのれを待ち望む者と、おのれを尋ね求むるものにむかって恵みふかい。主の救を静かに待ち望むことは、良いことである。人が若い時にくびきを負うことは、善いことである。主がこれを負わせられるとき、一人すわって黙しているがよい。(哀歌 3・15-28)

人もまた青年時代に苦しむにあらざれば、大人(おとな)となりて人生の味を十分に味わうことができないのである。苦は楽の素である。神の恩恵が、生涯のつらき経験を糖化する時に、人生の真の味は現われてくるのである。苦痛のない生涯は味のない生涯である。したがって意味のない生涯である。われらは青年時代に苦しめられて、人生の味の素を醸造(つく)りつつあるのである。ゆえに聖書に言う、

人、若き時に、くびきを負うは善し

と。若き時は2度はないといえ、人は若き時に十分に苦しむべきである。誤解のくびき、虐待のくびき、背棄のくびき、貧困のくびき、失敗のくびき、死別のくびき、重きくびきというくびきを、いずれもになうべきである。しかして忍耐その実を結び、人によらずして神によりて自己に勝つを得て、彼は、貴むべき神の子の自由に入ることができるのである。

11月14日

主人は彼に言った、「良い忠実な僕よ、よくやった。あなたはわずかのものに忠実であったから、多くのものを管理させよう。主人と一緒に喜んでくれ」。(マタイ伝 25・21)

天国は休憩所ではなくして活動場（はたらきば）である。「なんじの主人の休息に入れよ」といいたまわずして、「なんじの主人の喜びに入れよ」といいたもう。神の喜びは、人を助け導く喜びである。信者はキリストの国に入りて、この聖き喜びに入るのである。愛の働きが無窮におこなわるる所、そこが天国である。そしてこの世において善く働きし報償として、父と共に永久に働く愛の国に移さるるというのである。うるわしきものにしてキリスト教の天国観のごときはない。なまけ者の行く所にあらず、活動家の行く所である。さらに大なる責任をにないて神と人とのために働く所である。

11月16日

最後に、兄弟たちよ。すべて真実なこと、すべて尊ぶべきこと、すべて正しいこと、すべて純真なこと、全て愛すべきこと、すべてほまれあること、また徳といわれるもの、称賛に値するものがあれば、それらのものを心にとめなさい。あなたがたが、わたしから学んだこと、受けたこと、聞いたこと、見たことは、これを実行しなさい。そうすれば、平和の神が、あなた方と共にいますであろう。(ピリピ書4・8-9)

ゼントルマンは、人を、その弱気に乗じて苦しめず。

ゼントルマンは、人に悪意を帰せず。

ゼントルマンは、人の劣情に訴えて事をなさず。

ゼントルマンは、友人の秘密を公にせず。

ゼントルマンは、人と利を争わず。

ゼントルマンは、人の親切をないがしろにせず。

ゼントルマンは、殺生を好まず。

ゼントルマンは、自己を広告せず。

ゼントルマンは、自己のなしうることを他人になさしめず。

11月17日

死人の復活も、また同様である。朽ちるものでまかれ、朽ちないものによみがえり、卑しい者でまかれ、栄光あるものによみがえり、弱いものでまかれ、強いものによみがえり、肉のからだでまかれ、霊のからだによみがえるのである。肉のからだがあるのだから、霊のからだもあるわけである。(コリント第1書15・42-44)

不死の希望はそのうちに体の復活の希望をふくむ。朽ちざる新たな体を与えられるの希望無くして、永生不死の希望はむなしき希望である。霊は肉を古き衣のごとくに脱ぎ捨てて、欣然去って天上へのぼり行くにあらず、再び霊化されたる体としてこれを賜わるの希望をもって、暫時これと別るるのである。この意味において「キリストは死を滅ぼし、福音をもて、生命と朽ちざること(不死)とを明らかにせり」(テモテ後書1・10)である。キリスト教は唯物論に反対するが、それと同時に唯霊論に反対する。キリストの復活により、完全なる生命観が世に提供されたのである。すなわち神の子の生命を受くるにより、人は完全なる霊を賜わると共に、これに相当したる体を賜わりて、永久に生きるを得べしとのことである。霊にとどまらず体までが救われて、完全なる救いにあずかるのである。

11月18日

主を恐れることは知識の初めである、愚かなものは知恵と教訓を軽んじる。わが子よ、あなたは父の教訓を聞き、母の教えを捨ててはならない。それらは、あなたの頭の麗しい冠となり、あなたの首の飾りとなるからである。(箴言1・7-9)

聖書と天然と家庭、この三者ありて完全なる教育あり。恩恵のイエスよ、願わくはわれらもなんじになろうて、この三者にわれらの神を求め、ここに彼を探り得て、われらの全性の発育を計らんことを。願わくはわれら、書を読むこと多からざるがゆえに恥ずることなく、また学を講筵に聞くこと少なきがゆえにつぶやくことなく、よく神の与えたまいしところに満足し、聖書一卷にすべてなんじの聖意を探り、自由の天然になんじの霊能を読み、日ごとの糧を得んがために、われらが日々従事するわれらの卑しき労働に、貴きなんじの恩恵に接して、平凡なる我らの生涯も、われらをして完全のなんじに至らしめんことを。

11月20日

わが岩、わがあがない主なる主よ、どうか、私の口の言葉と、心の思いが、あなた前に喜ばれますように。(詩篇 19・14)

祈禱はこの事か、の事を神に祈願(ねが)うことにあらず。そは「なんじらの天の父は、祈求(ねが)わざる先に、なんじらの必需物(なくてはならぬもの)を知りたまえり」(マタイ伝 6・8)とあればなり。祈禱は自己を祈禱の態度に置くことなり。神をわが心中の第一位に置き、自己は単に恩恵の受器となりて、その祝福を仰ぐことなり。祈禱は人たるものがその造り主なる神に対してとるべき当然の態度なり。この態度にありて、彼の肉体は健全ならざるを得ず。彼の思想は明瞭ならざるを得ず。彼の行為は勇敢ならざるを得ず。彼の靈魂は高明ならざるを得ず。この祈禱の態度にありて、万物は彼のために働きて善をなさざるを得ず。祈禱は信者が神に対して採る服従の態度なり。待命の態度なり。受容の態度なり。彼は一言を発するを要せず、また一事を求むるを要せず、ただ態度を改むれば足る。最高の祈禱は無言無求の沈黙ならざるを得ず。

11月26日

すべての訓練は、当座は、喜ばしい者とは思われず、むしろ悲しいものと思われる。しかし後になれば、それによって鍛えられるものに、平安な義の実を結ばせるようになる。(ヘブル書 12・11)

余は言う、人生(ライフ)は完全であると。人生そのものは不完全である。しかし、それが達すべく定められし目的に達せんがためには完全である。人生は目的としては不完全である。しかしながら手段としては完全である。ある他の生命に入らしめんがために吾人を完成(まっとう)せんがためには完全である。患難は忍耐を生じ、忍耐は練達を生じ、練達は希望を生ず(ロマ書 5・3-4)という。人生はそのあまたの患難をもって、吾人の内に、確実なる栄光の希望を起こすのである。正当に用いられて、人生は完全なるものである。吾人が経る日は70年にすぎず、しかしてその誇る所は勤労と悲痛(かなしみ)とのみ(詩篇 90・10)なりと言えども、しかも人生はその短きがゆえに、かえって吾人をして永久に消えざる福祉(さいわい)を得べく準備せしむるのである。人生のこの意義を解して、何人もヨブにならいて、「ああ、われは生まれざりしものを」と言いて、おのが生まれし日をのろわないのである。

11月30日

イエスは答えられた、「よくよくあなたがたに言うておく。だれでも、水と霊生まれなければ、神の国にはいることはできない。肉から生まれるものは肉であり、霊から生まれる者は霊である。あなたがたは新しく生まれなければならないと、わたしが言ったからとて、不思議に思うには及ばない。風は思いのままに吹く。あなたその音を聞くが、それがどこからきて、どこへ行くかは知らない。霊から生まれる者も皆、それと同じである。(ヨハネ伝 3・5-8)

来たれよ、聖霊、来たりて再びわが心を俘虜(とりこ)にせよ。わが口に新しき歌を置けよ。わが心の堅き氷を解いて、その中に喜びの花を咲かせよ。わが眼をして、わが主をその栄光において見るを得さしめよ。わが愛心に能力を添えよ。われをして単に学の人たるのみならずまた働きの人たらしめよ。世は汝の降臨を要する切なり。われをしてまずなんじの光に撃たれしめよ。「われ、ここにあり。われをつかわしたまえ。」(イザヤ書 6・8)